一　次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

西暦一〇〇〇年頃から千年の歴史の中で、封建領主、教会、都市国家、帝国など、さまざまな統治形態が登場したが、一七世紀頃から「主権国家」が最も有力な統治形態として優位を占めるようになり、その主権国家は一九世紀頃から「国民国家」[1]へと収斂していくようになった。

この国家の形成の歴史は、チャールズ・ティリーの言う「強制集約」型と「資本集約」型（あるいはウィリアム・マクニールの用語に従えば「指令志向」型と「市場志向」型）という二種類の社会関係の様式が、「資本化強制」型へと総合し、収斂していく過程として解釈することができる。

「強制集約」型国家は、もっぱら強制力を伴う指令によって資源を動員する。「資本集約」型国家は、もっぱら市場を通じて資源を動員する。これに対して、「資本化強制」型国家は、［A］資源を動員する。これにより、「資本化強制」型国家は、「強制集約」型国家や「資本集約」型国家よりも効率的かつ大規模に資源を動員することができるようになった。その結果、国家の資源動員の能力が強化されたのみならず、市場経済も著しく発達することになり、「資本化強制」型国家はますます強力になり、国家間の闘争を勝ち抜いていったのである。

この「資本化強制」型国家こそが「主権国家」なのであり、そのより発達した形態としての「国民国家」なのである。統治形態が国民国家へと収斂していったのは、それが資源動員において最も高い能力を有していたからなのである。そして、国家の指令が市場に影響を及ぼす「資本化強制」型の資源動員とは、今日、「経済政策」として理解されているものにほかならない。

「資本化強制」型国家の権力が強大であるのは、それが「インフラストラクチャー的権力」であることによる。一方的な指令によって人民を動員する「強制集約」型国家の「専制的権力」とは異なり、「インフラストラクチャー的権力」は、制度を通じて市民社会と交流・調整しつつ、資源を動員する。その制度には、共通の言語、宗教、通貨、法制度、あるいはシティズンシップが含まれる。「資本化強制」型国家は、こうした制度を介して市民社会や市場と有機的な相互依存関係を形成することで、専制的権力よりも大規模かつ効率的な資源動員を可能とするのである。

インフラストラクチャー的権力は、制度を一元的に管理できる中央集権的な公的権力の存在を必要とするが、領域国家は、領土内において公的権力の一元化・中央集権化を可能とするものである。それゆえ、インフラストラクチャー的権力を行使する「資本化強制」型国家は、領域国家の形態をとる。近代国家の基本的な法的・政治的制度や経済制度が［B］の制約を受けるのは、そのためである。

また「資本化強制」型国家のインフラストラクチャー的権力は、「強制」と「資本」、あるいは「指令志向型」と「市場志向型」のハイブリッドであり、国家と市場の相互浸透という構造を有しているが、このハイブリッドの構造の相似形は、今日の資本主義経済におけるさまざまな制度の中にも見出すことができる。

たとえば、国民通貨は、国定信用貨幣論が明らかにするように、民間の信用取引から貨幣が供給されるという内生的貨幣供給論と、貨幣は国家の産物であるという外生的な表券主義のハイブリッドである。あるいは、中央銀行という組織は半官半民であり、民間の信用貨幣による支払い決済システムに国家が参入したものである。国債もまた、国家財政が民間金融市場に参入し、浸透したものと解することができる。

国民通貨、中央銀行、国債といった制度は、国家のマクロ経済運営にとって不可欠な政策手段であるが、いずれも［C］のハイブリッドの構造を有している。国家の経済における強力なインフラストラクチャー的権力は、これらの制度のハイブリッドな構造から生じているのである。

こうして国家は、財政金融政策によって、資本主義の不安定な動態を制御できるようになった。特に第二次世界大戦後になると、ケインズ主義的なマクロ経済運営によって安定化した資本主義は、飛躍的な発達を遂げることとなった。

資本主義の発展は、理論的に言っても、あるいは歴史的に見ても、国民通貨、中央銀行、国債といった制度がなければあり得なかった。クナップが言ったように、資本主義は国家が育てたものである。

ティリーは、千年の国家形成の歴史をたどり、国家形態が「資本化強制」型国家あるいは主権国家、さらには国民国家へと収斂していった要因は、戦争であったことを明らかにした。戦争が国家を生み、国家が戦争を生むのである。

国家とは、一定の軌道をもった大規模な集団行動、すなわち「ゴーイング・コンサーン」であるが、その軌道の大幅な変更はもっぱら国際環境の圧力によってなされる。とりわけ戦争という実存的危機を伴う国際的圧力は、国家という集団行動の形態にきわめて大きな影響を及ぼす。

言い換えれば、国家は、戦争を勝ち抜くために、国内の資源を大規模かつ効率的に動員しようとする。そして、その資源動員を可能とすべく、新たな国家体制を構築していくのである。「資本化強制」型国家、主権国家、とりわけ国民国家は、戦争のための資源動員に最も適した国家体制[a]として発明されたものであり、地政学的な闘争が繰り返されていく中で、他の諸国家によってモデルとしてモホウされていった。こうして統治形態は、国民国家へと収斂していったのである。

戦争による大規模な資源動員からは、国家体制だけでなく、さまざまな技術や制度が産み落とされた。大量生産方式、鉄道、航空機、ロケット、人工衛星、原子力エネルギー、コンピューター、インターネットといった技術、国民通貨、中央銀行、[b]ルイシン課税、福祉国家、「大きな政府」、財政出動、公式統計、国民経済計算といった制度は、いずれも戦争あるいは戦争準備を起源としている。[2]今日、我々の生活を支えている技術や制度の起源は、どれも血塗られている。我々の経済的繁栄は、先人の流した大量の血で贖われているのである。

技術や制度のみならず、思想もまた、地政学的対立によって形成されている。

たとえば、一七～一八世紀のヨーロッパにおける地政学的緊張から重商主義という思想が生まれたが、重商主義は経済学の起源である。あるいはイギリスの立憲主義や自由主義は、島国という地政学的環境に守られ、育まれた。二〇世紀に進んだ平等化や民主化は、二度にわたる世界大戦による総動員が契機となっている。ナショナリズムと戦争の縁の深さについては、言うまでもないであろう。

戦争や戦争準備を起源とし、戦争目的の資源動員の中で生み出された技術や制度あるいは思想は、戦争終結後も経路(注)依存性に従って持続し、「民政化」あるいは「スピン・オフ」されて、平時における資源動員に活用されることとなる。「民政化」という現象の技術における典型例は、原子力エネルギーである。原子力エネルギーは、元来、核兵器として開発されたものであるから、原子力発電は「原子力の平和利用」と称されるのである。ならば、大量生産方式、鉄道、航空機、人工衛星、コンピューター、インターネットもまた、軍事技術の「平和利用」なのであろう。

あるいは福祉国家は、強壮な兵士の育成という戦時中の政策が、戦後に民政化されたものであった。福祉国家とは、国家総動員体制の「平和利用」なのである。

経済政策というものもまた、戦争目的の資源動員の民政化あるいは平和利用であると言える。とりわけケインズ主義的なマクロ経済政策とは、二つの世界大戦における国家による大規模な資源の総動員が、物価水準に影響を与え、失業を劇的に解消したという経験を経て誕生したものであった。

もっとも、世界大戦以前にも、国家の経済介入による失業の解消や国民福祉の向上といった思想は、さまざまな優れた理論家たちの間で論じられてはいた。一九世紀後半のイギリスにおけるフェビアン社会主義やイギリス歴史学派、あるいはニュー・[c]リベラリズムといった思想の潮流は、その一例である。しかし、ケインズ主義的な経済運営や福祉国家が正統性をもってカクリツされるには、やはり第二次世界大戦を待たなければならなかったのである。[3]

世界大戦の総力戦が民政化されて、福祉国家やマクロ経済政策が誕生したという歴史的経緯は、経済政策というものの本質を理解する上での鍵となる。

すなわち、経済政策とは、国家がその経済的な目的を達成するために物理的及び人的資源を動員することなのである。とりわけマクロ経済政策というものは、国家による資源の「 D 」にほかならない。

戦争も経済政策も、いずれも国家による資源動員という点では本質的に同じなのである。ただ経済政策は、その目的が戦争における勝利ではなく、経済成長、景気回復、物価の安定、完全雇用、あるいは技術進歩であるというだけに過ぎない。

ジェームズ・K・ガルブレイスも、[4]気候変動問題の解決のためには、その目標に向けて人々を動員する経済プランニングが必要であると説く文脈において、第二次世界大戦中の戦時動員のためのプランニングが目覚ましい成果を収めたことに言及している。持続可能な経済とは、環境問題に配慮した集団行動のことであり、環境政策とは、そのような集団行動に向けて人々を動員する経済プランニングのことにほかならない。

そもそも「経済」と呼ばれているものは、一定の軌道をもった人々の集団行動なのであり、大規模なゴーイング・コンサーンなのである。デフレとは、国民が消費や投資を縮小させる方向へと向かう集団行動であり、反対にインフレとは、国民が消費や投資を拡大させる方向へと向かう集団行動である。経済政策とは、この国民の経済的な集団行動の方向を国家が操作することにほかならない。国家は、たとえばデフレ不況を克服しようとする際には、戦時国家が国民を戦地や軍事工場へと動員するように、財政出動や減税あるいは金利の操作などを通じて国民を消費や投資へと動員するのである。

経済が集団行動であり、経済政策が集団行動の操作であるならば、経済や経済政策を理解するために必要な理論は、集団行動の科学でなければならない。そして、ジョン・R・コモンズの「制度経済学」は、まさに集団行動の科学として構想された経済理論であった。

ひるがえって、この集団行動の科学は、経済のみならず政治や軍事を理解する上でも不可欠である。政治も軍事も集団行動だからである。地政学も経済学も、集団行動の科学の一分野なのである。

地政学と経済学のいずれもが集団行動の科学として理解されれば、両者を総合して地政経済学を成立させる道が拓かれる。マッキンダーの理論とは、まさにそのようなものであった。

（中野剛志『富国と強兵　地政経済学序説』による）

（注）　経路依存性……キーボードの配列、鉄道の線路の幅などのような既存の環境が、後代の社会に影響を与えること。

問一　傍線部a～cの片仮名を、漢字（楷書）で解答欄に記せ。

問二　傍線部1「国民国家」は、どのような点で「『強制集約』型国家」及び「『資本集約』型国家」よりも優れているのか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　近代国家の法的・政治的制度や経済制度により、大規模で効率的な資源の動員を可能とする点。
ロ　国家と市場の相互浸透により国家による司令を必要としない効率的な資源動員を可能とする点。
ハ　市民社会や市場と有機的な相互依存関係を形成することで、大規模な資源動員を可能とする点。
ニ　市場における権力の一元化・中央集権化により、大規模で効率的な資源の動員を可能とする点。

問三　空欄 A に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　共通の言語、通貨、法制度によって効率的に市場に介入することで
ロ　国家の強制的な指令が市場を介した経済活動に影響を及ぼすことで
ハ　一元的に管理可能である中央集権的な公的権力を必要とすることで
ニ　内生的貨幣供給論と外生的な表券主義のハイブリッドであることで

問四　空欄 B に入る最も適切な語句を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　歴史
ロ　領土
ハ　公権
ニ　戦争

問五　空欄 C に入る最も適切な語句を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　地理と歴史
ロ　技術と制度
ハ　戦争と経済
ニ　国家と市場

問六　傍線部2「我々の経済的繁栄は、先人の流した大量の血で贖われている」とはどのようなことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　我々の生活を支えている技術や制度の起源は戦争による大規模な資源動員であるから。
ロ　国民国家は戦争への資源動員に最も適した国家体制として発明されたものであるから。
ハ　戦争も経済政策もどちらも国家による資源動員という点では本質的に同じであるから。
ニ　戦争中に多くの死傷者を出したことが今日の日本の経済の発展へと繋がっているから。

問七　傍線部3「経済政策というものの本質」とはどのようなことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　国民が自由に経済発展するべく国家が妨げないようにすること。
ロ　国家の指令なしでも円滑な経済発展ができるよう整備すること。
ハ　国家が市場に対して効率的な資源配分の最適解を示唆すること。
ニ　国民の経済的な集団行動の方向を国家が操作しようとすること。

問八　空欄 D に入る最も適切な語句（漢字三字）を本文中から抜き出し、解答欄に記せ。

問九　本文に即すならば、傍線部4「気候変動問題の解決のため」にはどのようなことが有効だとされるか。「国民」と「環境」の二語を用いて、記述解答用紙の形式に従って十字以上十五字以内で、解答欄に記せ。

問十　本文の内容と合致するものはどれか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　「資本集約」型国家は、財政金融政策によって、資本主義の不安定な動態を制御できるようになった。
ロ　封建領主的な統治形態は戦争のための資源動員に最も適した国家体制として発明されたものである。
ハ　経済政策や政治及び軍事を理解するために必要な地政経済学は集団行動の科学でなければならない。
ニ　国民の福祉の向上を目指す福祉国家は、戦争を引き起こす「資本化強制」型国家の否定から生まれた。

二

次の文章は東常縁『東野州聞書』の一部である。これを読んで、あとの問いに答えよ。なお本文中、年号や人名、主語などを、括弧内に注記した箇所がある。

同（宝徳元）年九月十六日夜、畠山阿州（持純）光臨あり。いろいろの物語の内に申されしは、年月、眺望と申す題は、遠近ともにあるべきかと存ずるところに、春日三品（常閣）の申さるは、遠き心なり、遠望といふ題も眺望と同じ心なりと申さる、この事如何と、これへ尋ね申さる。古歌にて見え候ふべし、六百番の歌合に広沢池眺望とあり、これに詳しく候ふべしとて、すなはち取り出だして引く。大略、遠き心あり。前中納言（定家）歌に、

すみ来ける跡は光に残れども月こそふりね広沢の池【1】

とあり。これは眺望の心無しと難ず。[注1] 拾遺愚草[注2]の内、貞永の百首、眺望五首とあり。ことごとく遠き心あり。遠近ともに詠むならば、近き心、五首の内になど交らではあるべき。同百首を家隆の詠まる、この五首には、一首不審のあり。

天つ空雲[注3]のはたてを飛ぶ鳥の明日香の里をおきや別れん【3】

とあり。詞には遠き事あれども、心に見えず。たとひ別れの歌に近き心ありとも、稀の事なるべし。多くは遠き心あり。難ずるところ、さまであるべきのよし、物語あり。証歌を引き見る事は、当座、これ体の事なり。眺望といふ題にて、もと阿州の歌に、近き心を詠める。これによりて、春日三品も難じけるとかや。常光院（堯孝）の申しけるは、遠近ともにあるべし、ただ奥に望む心なりと申すよし、阿州物語あり。阿州の申されしは、俊成・定家の間は、いづれをとるべきか、我はただ俊成をとるべきよし申さる。これにも御同心あり。定家卿ことに勝れたるは、父に久しく習ふによりてなりと申されしなり。

同年九月十八日、夜に入り、阿州同道ありて、招月庵（正徹）へ（常縁ノ兄デアル東氏数ノ）御出あり。常縁も御供にありて、

思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風寒み千鳥鳴くなり【5】

夕されば潮風越えてみちのくの野田玉川に千鳥鳴くなり【6】

はま千鳥つま問ふ月のかげ寒し蘆のかれ葉の雪のした風

この三首を、招月へ、阿州、いづれもとは存じ候へども、強ひてはいづれをか召され候ふべきと尋ね申さる。招月の返事に、我は定家宗にて果つべき上は、いづれも同じ体の事には侍れども、はま千鳥つま問ふに付き侍るべしと申さる。阿州、強ひて残り二首はまたいづれをかと申さる。返事に、潮風越えてみちのくのなどと侍るあたり、なかなか思はしくなし、残り二首ならば、妹がり行けばのにてあるべきよしあり。先の夜、この沙汰ありし時は、[9] もこれにも、妹がりをとこそ物語ありけれと、（氏数ヨリ）承りし。

家隆の集に、眺望五首の内に、

天つ空雲のはたてを飛ぶ鳥の明日香の里をおきや別れん

この作意を、阿州問ひ申さる。これは、明日香[注4]の里をおきて行かば君があたりは見えずかもあらんとある歌を思ひて、詠める歌なり、この心は、明日香の古郷に夕暮れの空を眺めてあるに、雲のはたての風情も見えなどするに、鳥も飛び、興ことにおもしろきところを、明日はいづくへかおき別れんと詠めるなりと申されし。

（注）
1 遠望の心無しと難ず…六百番歌合において、相手方から、「眺望の心も見えず」と非難されている。
2 拾遺愚草…定家の家集（個人歌集）。
3 雲のはたて…雲の果て。
4 明日香の里をおきて行かば君があたりは見えずかもあらん…初句は「飛ぶ鳥の」。元明天皇の歌。

問十一 【1】の和歌の句切れはどこにあるか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 初句　**ロ** 二句　**ハ** 三句　**ニ** 四句　**ホ** 句切れ無し

問十二　傍線部2「など交らではあるべき」の意味として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　どうしてもまじっていなければならぬ。
ロ　どうしてまじらないことがあるだろうか。
ハ　どうしてもまじらなければならなくもない。
ニ　どうしてまじるはずはないといえるのか。
ホ　どうしてもまじったりしてはいけない。

問十三　【3】の和歌について、この歌に見出される修辞技巧のうち、本文中に指摘もしくは言及されているものは何か。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　縁語　　ロ　折句　　ハ　序詞　　ニ　本歌取り　　ホ　見立て

問十四　傍線部4「詞には遠き事あれども、心に見えず」とは、どのようなことを述べているか。その説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　歌の表現に遠くの事物を詠み込んでいるが、主題に遠さは表現されていない。
ロ　用いられる詞に不審な点はあるけれども、意味内容において不審な点はない。
ハ　明日香の里は確かに遠くに存在するが、現実感に乏しいと言わざるを得ない。
ニ　表現に耳遠い点が認められるものの、解釈の上で特に不都合とも思われない。
ホ　鳥の行方を想像している点はよいけれど、人が遠くを望む設定とは言えない。

問十五　傍線部5「なり」と文法的に同じものを含む用例はどれか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　神なりて落ちぬ
ロ　言ひ出だせるなり
ハ　なり合はざるところ
ニ　宿直人も皆起きぬなり
ホ　なりを鎮めて問はせ給ふ

問十六　傍線部7「我は定家宗にて果つべき上は」の意味として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　自分は定家の教えを墨守する使命を帯びた者である以上、
ロ　自分は定家の和歌を最上とする流派に属する者である以上、
ハ　自分は定家を尊崇する立場を死ぬまで守り貫く者である以上、
ニ　自分は定家が当時果たした役割をいま果たすべき者である以上、
ホ　自分は定家に誓って他流を討ち果たす起請を立てた者である以上、

問十七　傍線部8「潮風越えてみちのくのなどと侍るあたり、なかなか思はしくなし」は、【6】の歌の修辞技巧が、正徹にはかえって気に入らない旨を述べているのだが、その修辞技巧において、「潮」と対応する語となっている部分のみを、歌の第三句からそのまま過不足なく抜き出し、解答欄に記入せよ。

問十八　空欄 9 に入るべき人物は誰となるか。もっとも適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　常縁　　ロ　持純　　ハ　常閣　　ニ　堯孝　　ホ　正徹

問十九　本文の内容と合致するものはどれか。もっとも適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　持純は常縁の主人だったが、常閣に対抗するため、常縁の助言を積極的にもとめた。
ロ　常縁はさまざまな歌書に通暁しており、またたいへんな蔵書家として知られていた。
ハ　和歌の題の趣旨を正しく理解することは、歌道を修練するうえで重要な事柄だった。
ニ　俊成は定家の父であり、家隆の師だったが、定家と家隆では前者の方が優れていた。
ホ　正徹は堯孝と対立する歌道的立場をとり、歌壇の主導権をめぐり激しく争い合った。

問二十　次の詩は、本文中の二重傍線部「眺望」と同じく、楼閣からの眺めを詠んだものである。これを読んで、あとの問いに答えよ。（返り点、送り仮名を省いた箇所がある。）

昔人已乗白雲去　　此地空余黄鶴楼
黄鶴一去不復返　　白雲千載空悠悠
晴川歴歴漢陽樹　　芳草萋萋鸚鵡洲
日暮郷関何処是　　煙波江上使人愁

（『全唐詩』第百三十巻所収、崔顥「黄鶴楼」による）

（注）
1　黄鶴楼　武昌（今の湖北省武漢市）にあった楼閣。壁画の黄鶴が壁から抜け出し、仙人がそれに乗って飛び去ったことを記念して建てられたという。
2　漢陽　長江を隔てて武昌の対岸にある町。
3　萋萋　草木が生い茂るさま。
4　鸚鵡洲　川の中洲の名称。

（1）傍線部1「不復返」は「二度と戻らなかった」という意味である。この意味に即して返り点をつける場合、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　不レ復返
ロ　不ニ復レ返
ハ　不テ復返
ニ　不レ復レ返
ホ　不ニ復返

（2）傍線部2「空」の意味として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　あてどなく
ロ　関わりなく
ハ　たよりなく
ニ　とめどなく
ホ　果てしなく

（3）傍線部3「煙波江上使人愁」の意味として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　川面がもやにかすみ、もの寂しい夕景色に望郷の念をつのらせる。
ロ　近隣の夕飯の炊煙が漂う川面を見ると、故郷の家族が気にかかる。
ハ　川面がもやにかすみ、故郷がどこにあるか見えないことに苦しむ。
ニ　近隣の夕飯の炊煙が漂う川面を見ると、孤独の辛さが身にしみる。
ホ　川面がもやにかすみ、せっかくの美しい景色を隠したのを惜しむ。

〔以下余白〕

早稲田大学　商学部
2018年度　入試問題の訂正内容

＜商学部　一般入試＞

【国語】

●問題冊子４ページ：設問　一　問六

選択肢イロハニ の文末（４ヵ所）を以下の通り訂正

（誤）

～から。

（正）

～ということ。

●問題冊子５ページ：設問　二　後ろから６行目

（注）１ を以下の通り訂正

（誤）

遠望の心無しと難ず…

（正）

眺望の心無しと難ず…

以上